

[11]韓国研究センター年報

<https://hdl.handle.net/2324/2186169>

出版情報：韓国研究センター年報. 11, 2011-03-28. Research Center for Korean Studies, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

韓国研究センター10周年記念式報告書

日時：平成22年12月18日(土) 13時～17時30分

平成22年12月19日(日) 13時～18時

会場：九州大学 箱崎キャンパス 国際ホール

はじめに

韓国研究センターは、2010年12月19日、10周年記念式典の全日程を無事終えることができた。本行事に先立ち、中央図書館2階ロビーにおいて、10周年を記念してセンターの刊行物でその業績を振り返るとともに、日韓併合の経緯を物語る第1級の資料「伊藤博文の書」(旧前間家所蔵)を初公開し、前間恭作の著作も展示した。これは、日韓併合100年にあたる2010年が「日韓における大きな節目の年」であると考えたからであり、報道機関でも取り上げられて話題を集めた。

本センターは、1998年11月の金鍾泌韓国国務総理(当時)の来学が契機となって、1999年12月に創設(学内設置)され、2000年1月に開所式を行った。日本で最初の韓国研究センターであったが、当時は韓国学への関心がまだ薄く、10年前と現在とを比較すると、韓国と日本を取り巻く環境は大きく様変わりした。2002年の日韓ワールドカップ共同開催、そしてその直後から始まったヨン様ブームなど韓流の波が押し寄せ、一時的な流行だろうという大方の予想を裏切ってドラマ、映画、音楽などあらゆるエンターテインメント分野に進出して成功した。スマートフォンや薄型テレビで韓国メーカーも一層身近なものとなっている。さらに日本だけでなく国際社会における韓国の役割が飛躍的に拡大していることは、連日の報道からも明らかである。

また、地元福岡の変化としては2011年3月、九州新幹線全線開通によって福岡・九州のアジアに向けた期待が益々高まってきており、観光、経済、文化など日中韓のよりダイナミックな潮流が期待される。

このような日本と韓国の文化、経済、社会の融合の中で、韓国研究センターの役割の重要性は、ますます増していると自負している。学内では、P&P(九州大学研究プログラム・研究拠点プロジェクト)の支援による「辛基秀文庫」「梁三永文庫」「森田芳夫文庫」の開設を手がけ、また学外では金融、研究機関、教育、マスコミなど多彩なオピニオンリーダーで組織された福岡・釜山フォーラム事務局を運営している。海外の大学連携の一環として釜山大学校との共同科目コーディネーターを担当し、その実績の上に2011年度からはいよいよキャンパス・アジアのパイロットプログラム「日韓海峡圏カレッジ」を主管する予定である。

しかし、10年のこれらの歩みは、センターを支えて下さった学内外の諸先生方のご協力ご後援なしには成しえなかったものばかりである。このことを常に心に留め、次の10年がさらに飛躍できるようグローバルな活動を目指したい。

12月18日(土) 13:00～ 記念セレモニー

第一部記念セレモニーでは、大勢の関係者、一般参加者及び報道陣の集う中、まず有川節夫総長による歓迎の辞があり、その後、金鍾泌元韓国国務総理から届いた音声による祝辞を紹介した。金元総理より「『アジアを重視した知の世界的拠点大学』を目指す九州大学に期待されるのはきわめて大きなものがある」と強調されたことで、センターがグローバルな役割を果たすことが期待されていると、改めて認識した。続いて、金炳局韓国国際交流財団理事長から、「地域に対する関心」、「東アジアに対する関心」、「韓国学への関心」を持つことで日韓の新しい時代を切り開くことができる」と祝辞をいただいた。

次に、加藤重治文部科学省大臣官房審議官からは、

九州大学が日本で初めて10年前から韓国研究センターを持ち、独自に韓国研究及び交流を進め、地域と一体となった日韓関係を構築していると述べられ、九大がキャンパス・アジアの試金石となるよう、今後の活動に期待したいとの激励の言葉を頂いた。

続いて、高島宗一郎福岡市長より、アジアに開かれた福岡に向けて、今後の展望について語っていただき、UCLA 韓国研究センター長でもあり、世界韓国研究コンソーシアム代表でもある John Duncan 氏からは、日本の大学としては初めて、松原孝俊センター長が最初にコンタクトをとったことがきっかけとなって、以来連携を深めてきたことや、韓国学としての九州大学の重要性についてお言葉を頂いた。



《金炳局韓国国際交流財団理事長からの祝辞》



《加藤重治文部科学省大臣官房審議官からの祝辞》



《John Duncan UCLA 韓国研究センター長／世界韓国研究コンソーシアム代表からの祝辞》



《高島宗一郎市長からの祝辞》

12月18日(土) 14:30～

第二部の記念シンポジウムでは、趙延元駐福岡大韓民国総領事、石原進JR九州会長、川崎隆生西日本新聞社社長など著名な方々にもご出席いただいた上、一般参加の事前申し込みがすぐに定員に達するほど、市民の関心の高さを窺い知ることができた。

テーマは、「東アジアの新しい地域秩序の形成―日本における韓国研究の視座を求めて―」で、松原孝俊センター長の司会の下進行された。最初に、松原センター長より九州大学が目指すキャンパス・アジア構想と、そのパイロットプログラムとなる日韓海峡圏カレッジ構想についての説明があった。

続いて、武藤正敏在大韓民国特命全権大使による基調講演が予定されていたが、昨今の北朝鮮情勢に鑑み、任地国を離れることができない状況であったことから、急遽韓国で撮影されたビデオレターを送っていただき、映像によるスピーチとなった。武藤大使からは、韓国の国際的な役割が大きくなり日本との更なる連携が求められること、日韓の経済連携は今後、中小企業の役割が大きくなるであろうこと、そのために必要な韓国に対する幅広い理解と人材育成に関して、キャンパスアジア構想が重要な役割を担うであろうと述べられた。

更に、朴成勲釜山大学校副学長・対外交流本部長からも「東アジア大学協力の新しいモデル構築に向けて」という題目でキーノート・スピーチをいただいた。スピーチでは、釜山大学校と九州大学との1986年の学術

交流協定締結以降、現在に至るまでの学部間、大学院間での共同講義運営現況についてご紹介いただいた。

また、本格的なキャンパス・アジア推進に向けた今後のロードマップが提示され、第1段階として夏季短期共同講義の拡大、第2段階として正規の学期における共同講義の運営拡大、第3段階として3+1共同学位制の運営と複数学位制の運営を含むOpen Campus実現という構想を発表していただいた。

続いて、小此木政夫慶応義塾大学現代韓国研究センター長、姜尚中東京大学現代韓国研究センター長によるプレゼンテーションが行われた。小此木政夫センター長は「ハイブリッド」をキーワードに、世界標準を追い求める韓国と、独自の職人気質の日本の異種間交流の重要性と共に、大国となった中国に日韓がどう対応すべきかについて述べられた。また、姜尚中センター長は、2011年3月に開通される九州新幹線による九州の一体化と韓国へと門戸を開くことによる経済効果などについて意見を述べていただいた。特に、釜山と福岡という枠組みで捉える場合、人口・面積において福岡市は釜山の半分以下の規模であり、福岡市だけではなく九州全体を活性化させるためにも九州の県をまとめてアジアのゲートウェイにするのはどうかという意見を述べられた。

プレゼンテーションの後、プレゼンテーター2名を含む、John Duncan UCLA 韓国研究センター長/世界韓国研究コンソーシアム代表、白永瑞延世大学校国学研究院長による活発なディスカッションが繰り広げ



《姜尚中東京大学現代韓国研究センター長及び小此木政夫慶応義塾大学現代韓国研究センターによるプレゼンテーション》

られた。会場からはJR九州の石原進会長が、6年前から九州の7県が地域戦略会議を執り行っており、観光を推進するための様々な意見を交換していることをご紹介くださり、特に韓国における観光に対する取り組みでは、外国人向けのコールセンター、投資のための税制で見習うべき点が多いと指摘された。続いてJohn Duncan センター長は、2005年までは日本で東アジア共同体について論じられることはほとんどなかったことを述べ、ここ数年の急激な日本の意識変化について指摘された。

12月19日(日) 13:00~

翌19日は、第3部プログラムである【朝鮮半島をめぐるボーダー研究の最前線】を行った。これは、本センターと北海道大学スラブ研究センターが共催し、北海道大学グローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成」と九州大学教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクト「東アジア戦後史の基礎的研究」が助成した、合同シンポジウムである。

セッション1では、「サハリンとコリア」をテーマに、コメンテーターとして白永瑞延世大学校国学研究院長と崔吉城東亜大学教授をお迎えし、まず今西一小樽商科大学教授に「樺太・サハリンと朝鮮人」という題目で発表いただいた。今西先生は、終戦時に樺太・サハリンに居住していた朝鮮人がどのような経路で樺太・サハリンにたどり着き、またなぜ朝鮮半島へ帰国することができなかったのかについて、在朝鮮米軍司令部の資料、外交局参謀総長宛文書などの資料と共に解説された。

次に、三木理史奈良大学准教授より「北からの朝鮮人移住と樺太」というテーマでの発表が行われた。報告では、日本人移住者誘致に悩む樺太が人的資源確保の楨杆とした朝鮮人の導入と、それによって形成された朝鮮人社会の特徴を明らかにすることが課題として設定された。在樺朝鮮人は、当初樺太南部で日雇い労働や杣夫などに就業範囲を拡大、植民地期前後に北へ逃れた朝鮮人についてロシア革命の東漸と日本軍の撤

兵で沿海州からの避難者が相次ぎ、北サハリンを経て樺太への移住者が相当数に上ったことを紹介された。また、恵須取や地取等の鉄鋼工業都市は、産業化に伴うパルプ工場建設の時期と北サハリンからの移住の時期が一致したため、朝鮮人人口が増大したこと、在樺朝鮮人の増加を危惧した樺太庁が朝鮮人の間接的・直接的排除に乗り出したことが調査資料から読み取れると説明された。したがって、朝鮮人にとっての樺太とは、日本時代の朝鮮半島から一旦南北に分かれた民族が再会した稀有な場所ととらえることができ、山丹交易で北方民族の構築した地域的連続性の一時的再現の場であると総括された。

続いて、許粹烈忠南大学校教授より「韓国における強制労働研究の現状」というテーマでの発表が行われた。韓国では、1991年に韓国最初の従軍慰安婦被害者・金学順の記者会見を契機として、関連研究が活発になったという。また、慰安婦は、性奴隷としてだけでなく労働力としても戦時動員されたため、この分野の研究は女性労働者としての強制動員問題という視点も重要だと述べられた。そのほか、女性は軍隊慰安婦としてだけ軍隊とつながっていたのではなく、看護婦のような女性軍属としても関係しており、日本による侵略戦争が朝鮮の女性にどのような影響を及ぼしたのか、全体的に検討したいと報告された。韓国国家記録院で所蔵している強制動員関連名簿に85万人近くの名前が記載されており、すでに電子化して研究に活用できるが、創氏改名による分析作業の障害などが残っているので、今後はこの点をクリアすることが課題になると述べられた。

白熱する意見交換やQ&Aで休憩時間も惜しまれる中、セッション2へと移った。

セッション2では、「北東アジアの境界・北朝鮮」をテーマに、三村光弘環日本海経済研究所研究主任による「北東アジアにおける北朝鮮の位置」、倉田秀也防衛大学校教授による「北朝鮮と米中関係」、李鍾奭元韓国統一部長官による「北核問題の膠着：背景と展望」についての発表をいただいた。コメンテーターは岩下明裕北海道大学スラブ研究センター教授にお願い



した。北朝鮮情勢に関しては、本行事開催の数週間前にも、韓国のヨンピョン島砲撃事件で民間人死傷者を多数出すなど、これまでになく緊迫していた。それだけに、各発表後の質疑応答には多くの挙手があり、熱気溢れるセッションとなった。

まず最初に、三村光弘環日本海経済研究所主任には、「北東アジアにおける北朝鮮の位置」という題目で発表していただいた。北東アジアにおける北朝鮮の位置を「海」とし、その「海」のために韓国は「島国化」していることを指摘された。また、「経済」という観点から北東アジアを捉えた場合、北朝鮮は唯一、経済を共通言語とした交流ができず、「平和の配当」を最も必要としながら唯一享受できない国であると説明した。今後どのように北朝鮮と向き合うべきかについては、日本の国益のために国民的合意を得た上で戦略的に関係を構築することが重要であると指摘された。つまり、北朝鮮に「尊敬され、かつ恐れられる」日本のイメージ戦略が必要だということである。日本の国益とは、低コストで自国を守れる国際関係の樹立であり、朝鮮半島の平和と安定を維持し、北朝鮮から尊敬される国になるということだと最後にまとめていただいた。

続いて、倉田秀也防衛大学校教授に「北朝鮮と米中関係」という題目で発表いただいた。倉田教授は、今まさに日本中が関心を寄せている北朝鮮の6者会談と北朝鮮の意図について興味深い意見を述べられた。つまり、北朝鮮は「大国間の管理」について米中が手をつなぐことを危惧していて、北朝鮮の南北対話の断絶

や対米直接交渉の提案などは、中国抜きでの平和体制樹立を試みているためであると説明された。そのため、今後とも北朝鮮の対米傾斜は継続するであろうこと、多国間モメンタムは失速するであろうことが予想され、すでに米中主導の秩序形成は限界を迎えていると指摘された。

最後に、李鍾奭元韓国統一部長官に「北核問題の膠着—背景と展望—」につき、実際の対北朝鮮外交と防衛における第一線の現状について分析発表をいただいた。まず、北朝鮮核問題をめぐる状況を、①現在核兵器化段階にあり、このままでは北朝鮮の核放棄は一層難しくなること、②北朝鮮は2010年10月にも、6者会談復帰の用意があるという意思表示を行っているが、これは依然として中国と北朝鮮の繋がりが強力であることを示すということ、③北朝鮮の新しい濃縮ウラン施設公開は、これまでのオバマ政府の対北政策の失敗を明確に表すものである、と分析された。韓国の立場としては、2010年春に起きた天安艦哨戒船沈没事件と関連して謝罪の言葉を北から引き出せないまま6者会談が再開された場合には国内からの批判を避けられないと指摘し、さらに、北朝鮮と中国との関係に変化が見られることにも言及された。中・朝トップの頻繁な往来、中国政府の世襲の公式認定など、両国関係が極度に密着していることがわかったと述べられた。これは、西の陣営が北朝鮮の独裁世襲政権交代、民主的政権の誕生、市場開放を望むのに対し、中国は共産党独裁と社会主義の維持、改革開放政策による発展を望むという立場の違いが生むものであると説明された。一方、北朝鮮は核放棄に対する代価が十分であれば核を放棄し、そうでなければ核保有に固執するという既存の戦略通りであるが、追加核実験と濃縮ウラン施設の公開により、より有利な立場にたつたと解釈された。このことから、今後の展望としてはとにかく6者会談再開へ進むことが望ましく、9・19共同声明や2・13合意を履行するための努力こそが、6者会談参加国すべての共通の利益を追求する道であると結論を述べられた。

セッション2でコメンテーターを務めていただいた岩下明裕北海道大学スラブ研究センター教授からは、

2010年12月2日北海道新聞に掲載された教授の記事を資料に、昨今の中国、ロシアとの領土問題で日本が弱腰に見えるが、事実はその逆であるという意見を述べていただいた。つまり、2010年9月の海上保安庁による中国人船長の逮捕とそれに続く拘留延長は、自民政権時代には「尖閣には触れない」という日中の暗黙の了解があったが、前原外相は今回それを無視して尖閣を日本領だと攻めにでた証しだというものである。ロシアに関しても、プーチン前大統領が歯舞、色丹の引渡しを約束したにも関わらず、日本はソ連による「不法占拠」を強調して北千島、南樺太まで取り戻そうと頭を働かせているように見え、そのためにメドベージェフ大統領が自ら国後に乗り込む結果を生んだのだと説明された。日本を取り巻く領土問題、外交問題の見方として大変興味深い内容であった。

当日は、午後6時過ぎまで大変長時間にわたるシンポジウムであったが、最後まで多くの方々にご参加いただき活発な意見交換ができ、10周年記念行事としては大変意義のあるものであったと思われる。

おわりに

今までの10年では、「日韓地域連携の形成—福岡・釜山間を中心に」のテーマのもとに、UCLA 韓国研究センターの John Duncan 教授と協力しながら世界韓国研究コンソーシアムの立ち上げ、釜山大学と九州大学間で教員の入れ替え等、日本初の韓国研究センターとして先駆的な取り組みを行ってきており、その結果日本—韓国間の交流は飛躍的に前進したと言える。

今後は、「東アジアの新しい地域秩序の形成—日本



《18日記念式典後の記念撮影》

における韓国研究の視座を求めて—」をテーマにし、九大、慶大、東大の3大学韓国研究コンソーシアム結成の取り組みを進めていくと同時に、いよいよ2011年度には CAMPUS Asia 構想に向けたパイロットプログラム「日韓海峡圏カレッジ」の開校も予定している。

「日韓海峡圏カレッジ」とは、日韓相互理解の促進と大学の国際競争力向上、アジア科学技術研究者コミュニティ形成の基盤作りを目標とし、九州大学と釜山大学がそれぞれ50名ずつを双方の大学へ派遣し、4週間に渡り「リーダー教育」、「フィールドスクール」、「キャリア教育」を集中的に行うものである。2011年度は施行版実施となるが、これらの画期的なプロジェクトを通して、最終的には国境を越えた地域連合の形成、すなわち「東アジア共同体」に向けた論議を深めていきたいと考えている。

これらセンターの取り組みは、東アジアの平和と安定に大きく貢献するものと思われる。今後とも関係各位の御支援御協力をお願いしたい。

(資料1)

祝 辞

金鍾泌 (元韓国国務総理)

ご来賓の皆様およびご列席の皆様。

私は、金鍾泌 (キム・ジョンピル) です。

このたび九州大学韓国研究センター開設10周年を迎えられ、本日ここに盛大に記念式典が開催されますことを、心からお祝い申し上げます。とりわけ、有川節夫総長、松原孝俊韓国研究センター長をはじめ九州大学関係者すべての皆様に、心よりお慶びを申し上げますとともに、アジア研究において100年の誇るべき伝統と実績を築いてこられたことに、深い敬意を表する次第であります。

本来であれば、私も、韓国から式典に馳せ参じなければなりません、諸般の事情により、本日、参加できないことを実に残念に思います。

私は、国務総理時代に、九州大学において、講演をする機会がありました。1998年でした。その講演では、日韓の新しい時代を担う若者に対して、日本の未来を見据え、さまざまな分野を担う多くのリーダーとなり、日本と世界の発展に貢献して欲しいと期待しました。過去にとらわれることなく、未来志向で新たな日韓関係を構築すべきだと提案したところ、幸いにも当時の杉岡陽一総長と韓国国際交流財団の全面的支援で、日本で最初の韓国研究センターが九州大学に設立されました。

今年は韓日併合100年にあたります。成熟した日韓関係が実現するかどうか、歴史の大きな節目にきています。戦後65年を経た今日、国際社会の多極化、グローバリズム、持続的成長、環境問題、少子高齢化などなど、日韓共通の課題が多く現れています。これらへの解答を、どう見出していくのか、2011年に開校100年に及ぶ実績を持ち、「アジアを重視した知の世界的拠点大学」を目指す九州大学に期待されるのはきわめて大きなものがあります。中でも、韓国研究センターは、松原孝俊センター長と多くの先達、関係者の努力のもとに、グローバルな視野とローカルな眼差しを総合し、先端研究の推進、世界レベルで活躍する専門家の育成などの有為な活動を、実に活発に、独創的な方法で行なっておられるだけに、その研究機能の充実を期待するところです。

私は、この10周年を期して、九州大学韓国研究センターがあらためてこれからの時代の行く末を見据え、世界で活躍する研究者を輩出し、日韓を基軸としたさまざまな課題に挑戦する知識と知恵を創造し、アジアとともに生きるという視点と「グローバルな発想」に立ち、韓国研究の世界的研究拠点を、九州大学に創出して欲しいと願います。

最後に、日本を代表する大学として、約100年にわたり揺るぎなく建学の精神を継承し、大学におけるアジア研究の発展をリードしてこられた韓国研究センターに、皆様とともに、国内外大学関係者、すべての方々とともに、そして九州大学名誉博士である私からも、あらためて心からの拍手を送りたいと存じます。

韓国研究センターの今後ますますのご発展と関係者皆様のご多幸ご活躍を祈念いたしまして、お祝いのご挨拶とさせていただきます。本日はまことにおめでとうございます。

(資料2)

基 調 講 演

武藤正敏 (在大韓民国日本国特命全権大使)

在韓国大使の武藤でございます。本日は九州大学韓国研究センター設立10周年記念、誠にありがとうございます。韓国と一番近い九州の地に韓国研究センターができて、そして韓国と日本との交流を深めていくことは、大変意義深いことだと思います。私もこの設立シンポジウムに是非伺いたいと思っておりましたけれども、11月23日、ヨンピョン島におきまして北朝鮮の攻撃があり、今、私どもは任国を離れないようにということになっておりますので、誠に恐縮でございますけれども在韓国大使館の私の部屋から皆様方に一言メッセージを送らせていただきたいと思います。

私は、今年の8月5日に韓国に赴任いたしました。ちょうど日韓併合100周年にあたる月でございます。この100周年という月が単なる通過点かといいますと、私はこちらに來まして、これが大きな転換点であるという風に強く感じるようになりました。

国交正常化が1965年でございますけれども、それから今日までの日韓関係というのは、非常に難しい時代が多々あったと思います。日本が韓国を植民地化した歴史、これが非常に重くのしかかってまいりますし、教科書問題ですとか、あるいは慰安婦の問題ですとか、あるいは日本の政府高官が歴史について発言するたびに、韓国は非常に激しく日本に対して怒りをぶつけたことがございます。こうした日韓の荒波を乗り越えてきたのが過去45年でございますけれども、今日のような日韓関係を作り上げた一番大きな要因が、やはり国民交流を通じた相互理解の増進だと思います。

今後とも、歴史問題というのは決して日韓間でなくなることはないと思いますけれども、ただ歴史問題が日韓間の協力関係を大きく損なうことが、ほぼなくなった、そういう時代になってきたのではないかと考えております。ただそうした中でも、竹島問題はおそらく別でしょう。この問題をめぐってはこれからも難しい状況が起きることが考えられます。

そして今後の100年。これはどういう100年になるのかと私はいろいろと考えておりましたけれども、協力の100年、そしてお互いに学びあう100年、そしてアジアにおける協力の中核となる日韓関係。こうした関係が日韓の間で築かれていくのではないかという風に考えております。

それでは、これまでの100年をもう一度ゆっくりと振り返ってみたいと思います。1965年、日韓国交正常化しました。その当時、韓国で日本のことを勉強しておられる方々というのは、親戚の方にも「自分は日本について勉強している」と言えない時代であったようでございます。

これが大きく変わってきたのが、おそらく1988年のソウルオリンピックの頃だと思います。私が今でも非常に強く印象に残っておりますことは、当時、韓国で初めて旅券の発給が自由化されました。そしてこれを記念して、確か朝鮮日報だったと思いますけれども、7~800人の観光団を日本に送りました。ただ、新聞社ですからテーマを選びまして、『日本における韓国文化を訪ねて』ということで日本を訪問しました。韓国に帰りまして、これだけ大きな旅行団だったわけですからKBSで討論会がありました。最初のころはおじいさんが発言して、日本なんてたいしたことはない、大して面白くなかったとか、そういう類の発言だったと思います。アナウンサーがおじいさんたちの発言を気にしてもう少し穏やかにというようなそういう雰囲気になりました。で、ある時、若い

女子学生だと思いますが、手を上げて、私は日本に行って韓国の文化を見てきましたけれども、本当に印象深かったのは自分が見た日本というのはおじいさんやおばあさん、お父さんやお母さんが見た日本とは全然違うんだということでした。それ以来、討論のトーンががらっと変わりました。つまり、多くの方々が同じものを見てきたために、その女子学生が言ったことが理解できたんだと思います。

それ以降、1998年に金大中大統領が就任されました。そして文化開放が行われました。日本の文化が開放されるまでは、韓国では日本の文化を開放すると日本文化がわっと入ってきて韓国の文化がつぶれてしまうということをおっしゃっていましたが、結果はどうなったのでしょうか。日本において韓流ブームがこれだけ盛んになりました。そして韓国においても、日流ブームが起きました。日本で皆さんご存知の『冬のソナタ』そしてテレビのゴールデンアワーで行われた『アイリス』。最近ではポップスでいえば、少女時代とか、カラとか、もう日本に進出すればすぐにヒットチャートのトップにでるようなアーティストが日本では大変評判になっています。

それから日本のドラマのリメイク、『ベートーベン・ウイルス』とか『花より男子』などのリメイクが非常に韓国では人気を博しています。こういった文化交流を通じてお互いがお互いを好きになる、こういう関係が出来上がってきたんだろうと思います。

先ほど申し上げましたように、これからは歴史の問題が日韓関係で障害にならないような時代になってくるだろうと思われまます。ただ、われわれ日本人としてそういった韓国の変化に甘えてはいけないんだろうと思います。やはり日本人自身が日韓の歴史を理解する努力、これが韓国の方々の日本に対する気持ちを和らげる一番大きな要素だろうと思います。

最近では、福岡ではもうほとんど韓国と福岡は一体のようなものだとわれています。福岡から海外に行く場合、国際便がなければ仁川（インチョン）に来て飛ぶのが一番速いと思います。それから、最近では日産が九州に生産拠点を大きく移して、海外から部品の輸入を倍増させて4割は海外から輸入するという記事が確か載っていたと思います。日本のメーカーでも韓国に修理用の部品をほとんど置いていなくて、いざという場合には九州から持ってくるという風に聞いています。いずれにしても福岡の経済圏と韓国の経済圏はほぼ一体となっているといえます。

私は韓国に3年ぶりに参りました。来まして一番印象的だったのは、韓国の国際的な役割が非常に高まっているということです。G20を韓国で開催したということですが、G8以外の国、またアジアで開催する初めての国が韓国でございます。韓国はそれを非常に誇りにしておりましたけれども、大統領は非常に立派なリーダーシップを発揮されて、あまりお話にならない首脳にはお話を促し、また中国とアメリカとの間に入って調整をしたり、立派なホストとしての役割を果たされたと思います。

韓国がこういった役割を果たすということは、日本にとって非常に重要でございます。これまで日本はG8の一員として国際社会において大きな役割を果たしてまいりましたけれども、ただ、欧米の中であってアジアでは日本だけでした。これからは韓国という非常にいいパートナーがアジアにできた。しかも韓国と日本というのは、価値観を共有し、同じような経済的構造でございますので、国家利益も非常に似通っている。また、アジア太平洋にある隣国として、この地域の安全保障に重大な関心を抱いているわけです。非常に多くの共通点があるわけです。両国が共に力を合わせることによって、アジアの地位を高めることもできると思いますし、日本と韓国それぞれの地位を高めることができるだろうと思います。

第二点として、日韓の経済関係はこれから大きく変わっていくのではないかと思います。すなわち、これまで韓国は日本から設備ですとか、部品ですとか、素材を輸入して、これを加工して海外にということが発展してきた経済でございます。しかしこれからは、韓国から日本への部品、素材の輸出がどんどん増えてくるのではない

かと思えます。先ほど申し上げました日産の例が、まさにその典型の例であろうと思えます。最近では、円高を背景といたしまして、日本の一流製造業の幹部の方々は、もうオールジャパンではやっていけないということをおっしゃられます。これから海外から部品をどんどん輸入して、生産してそれを途上国に輸出する、新興国向けの製品を作るということになってきますと、韓国から部品素材を輸入するケースが非常に増えてくると思えます。先般も韓国の要請に基づきまして、日本の製造業と韓国の部品メーカーとの商談会を行いました。二日間で確か200ちょっとの商談会を行われたと思えますが、日本のメーカーは大変熱心に韓国の部品素材メーカーと商談をしていました。

また先般、投資環境調査団が韓国に来ました。日本の部品素材メーカーの、中小でございますけれども、その企業のトップの方々が、プサン、ウルサン、チャンウォン3ヶ所を回ったと思えます。日本の素材部品メーカーもこれから海外に進出して、生産をしないと、先ほど申し上げたような日本の製造業が部品を輸入するという時代に対処できないという時代になってくると思えます。そうしますと、日本の中小企業の韓国への投資も増えてくるだろうと思えます。韓国は、日本の中小企業にとって非常にメリットがあると思えますのは、ここにサムソン、LG、現代自動車といった製造業があるということで、直ちにここで生産したものをこういったメーカーに納入することができると思えます。東レが韓国に進出してきて、サムソン電子と非常にいい関係を結んでいます。これから日本の中小の部品素材メーカーも、韓国に大いに出てきていただいて、こうした韓国の製造業とタイアップしていただくということは非常に有意義だと思えます。それから、韓国では大統領を中心に中小企業を育成しようという努力を非常に強化しています。そうした意味で、韓国の中小企業とタイアップすることは日本の中小メーカーにとっても色々とメリットがあるのではないかと考えられます。それから、韓国では労働問題について、特に日本企業が労働問題に困っているということをおっしゃりました。そういった問題についても真剣に検討しようとおっしゃられます。

こういったいろいろな条件、日本にとって韓国に投資する有利な条件が整いつつあると考えております。そうしますと日本の中小企業の投資も韓国にどんどんくるのではないかと期待しておりますし、そうなってくると韓国から日本への部品素材輸出がますます活発になってくるのではないかと考えます。

韓国の大手の製造業は、2000年代中盤と比べて大変大きく成長してきて、力をつけてきています。製品も大変良くなってきています。そうした成長背景といたしまして、あらためて日本に進入しようという動きがこれから益々加速していくのではないかと考えます。サムソンのテレビなどは、アメリカでは販売店の一番いい所に置かれています。サムソンやLGの製品が日本に入ってきて韓国の製品が認められるようになりますと、日本において韓国製品の占める位置というのはますます高くなるだろうと思えます。このように韓国の部品製造業の対日輸出、そして韓国の大手製造業の製品が日本に大量に入ってくるようになりますと、今までの日本の韓国への輸出構造も一辺倒の関係が変わってくるのではないかと考えます。相互乗り入れの経済になってくるというのが私の見方でございます。

これから日本と韓国が共に力を合わせて世界で大きな経済的な役割を果たせる時代が来るんだろうと思えます。もうすでにエネルギーの面では、例えば韓国の方々はこれから日本と組んで海外でエネルギーを調達しようという流れができています。日本でもそういう流れになっています。エネルギーの調達にあたっては、開発途上国に進出しなければなりません。政治的なリスク、経済的なリスクもあります。ある国で、政変が起きて日本と韓国の企業が追い出されそうになったときに、日本と韓国の政府が協力してこれを守ったということがございます。それから石油の場合には、産油国と消費国の対話があるように、どうしても資源の産出国が独占的になりがちで消費国は競争的になりがちであるので、したがって消費国も対話して協力していかないとどうしても高いものを

買わされてしまいます。そこで日韓が協力することがきわめて重要です。それから、海外におけるプラント建設についても、ほとんど韓国政府が独占するくらい強くなっています。ただ韓国も過当競争気味になっていますので、やはり日本と協力することによってより有利な条件でプラント建設を請け負えるようになるということは非常に利益があることだと思えます。そうした意味で日韓は第3国市場においても協力する余地が大いにあると思えます。

こういった経済関係を作り上げていく上で、FTAは極めて重要です。日韓のFTAというのは、単に物品関税をお互いに下げるというのではなく、これから日韓が協力していく土台作りという意味合いが非常に大きいのだろーと思えます。そういった意味で日韓で共通のルール作りをしていく、これがやはり大きな要素になっていくのだろーと思えます。それから企業の連携を図る、こういうFTAにしていくべき、EPAにしていくべきだろーと考えています。

何よりも大事なのは、これからアジアにおける協力がいろいろと進んでいくだろーと思えます。日中韓の協力も進んでいきます。日中韓が協力するにあたって、中国は、どうしても日韓とは若干体制も異なりますし、利益も違いますし、国自体が随分違うんだろーと思えます。そこで日韓が共通のルールを作って一体となって中国と協力を進めていくということがよりよい協力を進めていく上で重要ではないかと思えます。また、日韓というのはアジア全体のなかで協力するにあたって、共通の利益を持っているわけですから、日韓がアジアの中で協力するというのは極めて重要なことだと思えます。

こうした協力を進めるにあたって重要なことは、今まで日韓の間では相互理解を進めてきたと申し上げました。文化交流が進んできたことと申し上げました。でも、まだ日韓でお互いに理解しあっている部分は狭いのではないかと思えます。日本人で韓国のドラマが好きだ、韓国のポップスが好きだという人はいらっしゃいますが、韓国の全体をわかってらっしゃる方は少ないのではないかと思えます。そういった意味で、より広くお互いを理解することが重要でございます。そういう意味では、留学生交流ですとか、あるいは今、日中韓で進められていますキャンパスアジア構想これが非常に重要ではないかと思えます。このシンポジウムの中でもキャンパスアジア構想について議論が行われると聞いておりますけれども、是非、これを実現できる方向に向けて具体化していただければと思えます。

最後になりましたが、最近の日韓の間はお互い学びあう関係です。日本が韓国に対してこれまでどういう役に立てたかという、おそらく韓国の方々が肌で感じてらっしゃるのは、日本は韓国にとってよいモデルを提供したということではないかと思えます。そして技術、あるいは几帳面さこういった面で日本は韓国に非常に参考になっていると思えます。これから、韓国は日本にとってものすごく参考になるんじゃないかと思えます。韓国の世界化に向けた姿勢、韓国の大学生、4年制の大学に通っている方々のおそらく半分くらいは、夏休みを含めて海外で勉強されています。それから韓国の企業は、新興国向けの製品は新興国向けに作っています。欧米向けに作った製品を新興国で売っているわけではありません。このように世界でどのように生きていくかということについて、韓国は非常に熱心です。こういった世界化に向けた姿勢は日本がこれから韓国から大いに学ぶべきだと思えます。いずれにしましても、これからの100年、日韓はお互いに協力する関係、そしてアジアの中における共同体の中核となる関係、そしてお互いに学びあう関係になっていくと思えます。そうした関係になるように我々すべてが努力することが大事だろーと思えます。

有難うございました。

(資料3)

九州大学韓国研究センター10周年記念行事

日時：2010年12月18日(土) 13時～17時30分
2010年12月19日(日) 13時～18時

会場：九州大学 箱崎キャンパス 国際ホール

【1日目プログラム】

日時：2010年12月18日(土)

開場：12時30分 開会：13時 閉会：17時30分

【第1部：10周年記念セレモニー】 13時～

司 会：出水薫（九州大学韓国研究センター兼任教授・法学研究院教授）

開会の辞：松原孝俊（九州大学韓国研究センター長）

歓迎の辞：有川節夫（九州大学総長）

祝 辞：金鍾泌（元大韓民国国務総理）音声メッセージ

金炳局（韓国国際交流財団理事長）

加藤重治（文部科学省大臣官房審議官・高等教育局担当）

John Duncan（UCLA 韓国研究センター長／世界韓国研究コンソーシアム代表）

来 賓：趙廷元（駐福岡大韓民国総領事）

高島宗一郎（福岡市長）

江口吉男（福岡県議会議員／福岡県日韓友好議員連盟会長）

田中俊太（福岡県国際交流局長）

金信夫（福岡韓国商工会議所元会長）

朴成勳（釜山大学校副学長・対外交流本部長）

崔徳寿（高麗大学校教授）

朴泰均（ソウル大学校教授）

川崎隆生（西日本新聞社社長）

山本正秀（やまやコミュニケーションズ社長）

姜鶴子（青丘文化ホール代表／辛基秀文庫寄贈者）

石原進（JR九州会長／福岡・釜山フォーラム福岡側代表世話人）※第2部より出席

【第2部：記念シンポジウム】 14時30分～

テ ー マ：東アジアの新しい地域秩序の形成—日本における韓国研究の視座を求めて—

司 会：松原孝俊（九州大学韓国研究センター長）

Keynote speech : 武藤正敏 (在大韓民国日本国特命全権大使) VTR 講演
 「東アジアの新しい地域秩序の形成—新時代の日韓関係—」
 朴成勲 (釜山大学校副学長・対外交流本部長)
 「東アジア大学協力の新しいモデル構築のために」

1. プレゼンテーション : 15時～

姜尚中 (東京大学現代韓国研究センター長)
 小此木政夫 (慶応大学現代韓国研究センター長)

2. ディスカッション : 16時～

姜尚中 (東京大学現代韓国研究センター長)
 小此木政夫 (慶応大学現代韓国研究センター長)
 John Duncan (UCLA 韓国研究センター長/世界韓国研究コンソーシアム代表)
 白永瑞 (延世大学校国学研究院長)

【2日目プログラム】

日時 : 2010年12月19日(日)

開場 : 12時30分 開会 : 13時

【第3部 : 朝鮮半島をめぐるボーダー研究の最前線】 13時～

—九州大学韓国研究センターと北海道大学スラブ研究センター合同シンポジウム—

主 催 : 九州大学韓国研究センター・北海道大学スラブ研究センター

共 催 : 北海道大学グローバル COE プログラム「境界研究の拠点形成」、
 九州大学教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクト「東アジア戦後史の基礎的研究」

会 場 : 九州大学 箱崎キャンパス 国際ホール

セッション1 「サハリンとコリア」

報告 : 今西一 (小樽商科大学教授) 「樺太・サハリンと朝鮮人」
 三木理史 (奈良大学准教授) 「北からの朝鮮人移住と樺太」
 許粹烈 (忠南大学校教授) 「韓国における強制労働研究の現状」

司会 : 松原孝俊 (九州大学韓国研究センター長)

コメンテーター : 白永瑞 (延世大学校国学研究院長)

崔吉城 (東亜大学教授)

セッション2 「北東アジアの境界・北朝鮮」

報告 : 三村光弘 (環日本海経済研究所研究主任) 「北東アジアにおける北朝鮮の位置」
 李鍾奭 (元統一部長官) 「北核問題の膠着 : 背景と展望」
 倉田秀也 (防衛大学校教授) 「北朝鮮と米中関係」

司会 : 出水薫 (九州大学韓国研究センター兼任教授・法学研究院教授)

コメンテーター : 岩下明裕 (北海道大学スラブ研究センター教授)

(資料4)

10周年記念行事来賓者リスト

氏名	所属	役職
石井幸孝	元JR九州	会長
石川捷治	元センター長／久留米大学法学部	教授
石原進	JR九州／福岡・釜山フォーラム福岡側代表世話人	会長
伊東正一	九州大学韓国研究センター委員	教授
稲葉継雄	九州大学韓国研究センター委員	教授
今西一	小樽商科大学	教授
大塚芳典	福岡県弁護士会国際交流委員会	委員長
岡克彦	長崎県立大学	教授
小此木政夫	慶應義塾大学現代韓国研究センター	センター長
金子昌信	九州大学数理学研究院	院長
川崎隆生	西日本新聞社	社長
姜尚中	東京大学現代韓国研究センター	センター長
姜鶴子	青丘文化ホール／辛基秀文庫寄贈者	代表
金炳局	韓国国際交流財団	理事長
金基大	駐福岡大韓民国総領事館	領事
金英子	福岡韓国商工会議所	事務局職員
金信夫	福岡韓国商工会議所	元会長
鄭守源	東西大学校	教授
辛美沙	辛基秀文庫寄贈者	
辛理華	辛基秀文庫寄贈者	
田中俊太	福岡県	国際交流局長
John Duncan	UCLA韓国研究センター／世界韓国研究コンソーシアム代表	センター長
崔祐溶	東亜大学校法科大学法学部	副教授
崔德寿	高麗大学校文科大学韓国史学科	教授
崔博徳	福岡韓国商工会議所	事務局長
崔玄洙	韓国国際交流財団東京事務所	所長
趙延元	駐福岡大韓民国総領事館	総領事
西岡健治	福岡県立大学	教授
朴泰均	ソウル大学校国際大学院	教授
深川由紀子	早稲田大学	教授
白永瑞	延世大学校国学研究院	院長
許粹烈	忠南大学校	教授
オーガスティン・マシュー	九州大学比較社会文化研究院	講師
三木理史	奈良大学	准教授
三村光弘	環日本海経済研究所	研究主任
山下邦明	九州大学言語文化研究院	院長
山本正秀	やまやコミュニケーションズ	社長

※アイウエオ順/敬称略

センター彙報

1) 2009年度活動報告

2009年4月～2010年3月

年	月	日	活動内容	場所	主催・共催・後援・助成
2009	6	18	第44回定例研究会 崔祐溶先生（東亜大学校） 「住民参加の韓日比較」	九州大学韓国研究センター	
		25	第45回定例研究会 李栄薫（ソウル大学校） 「共同研究を提案するになったこれまでの経過」 朴煥珺（落星台経済研究所） 「いわゆる日帝強制連行者名簿について」 永島広紀（佐賀大学） 「戦前期の福岡県・北部九州における朝鮮半島南部出身者の動向」	九州大学韓国研究センター	
		27-28	日韓次世代学術フォーラム 第6回国際学術大会	九州大学	主催：日韓次世代学術フォーラム 主管：九州大学韓国研究センター、東西大学校日本研究センター 協賛：国際交流基金、東西大学校 後援：日本国外務省、駐福岡大韓民国総領事館、日韓文化交流基金、JR九州
	7	7-10	第5回世界韓国学次世代ワークショップ	ハワイ大学	
	8	1	第46回定例研究会 槻木瑞生「1920年代の大陸への移住朝鮮人—朝鮮人の流動性—」 花井みわ「日本の間島政策と間島朝鮮人教育」 小林玲子「大韓帝国期に設置された境界警務署の役割について—『旧境界警務署鐘城分署ノ日記 中間島関係事件抜粋』を用いて—」	九州大学韓国研究センター	
10	24	コロキウム「郭暲澤監督の映画 世界—友情の年、隣邦より「チング(友)」が来たる—」	福岡市総合図書館映像ホール・シネラ	主催：九州大学 韓国研究センター、福岡市総合図書館、映像ホール・シネラ実行委員会 助成：韓国国際交流財団 後援：日韓文化交流基金、財団法人福岡県国際交流センター、国際交流基金	

年	月	日	活動内容	場所	主催・共催・後援・助成
2009	11	7	辛基秀文庫開設記念ワークショップ 「グローバル時代の朝鮮通信使研究」	九州大学国際ホール	主催：九州大学韓国研究センター 共催：九州大学附属図書館付設記録資料館九州文化史資料部門、九州大学P&P 後援：日韓文化交流基金
	12	19	国際学術ワークショップ 「韓国・台湾から帝国〈日本〉を考える—『梁三永文庫』『森田芳夫文庫』『辛基秀文庫』を活用するための前提作業—」	九州大学国際ホール	主催：九州大学韓国研究センター 共催：九州大学P&P
		20	国際シンポジウム 「植民地期および米軍政下の朝鮮映像・画像アーカイブ—映像・画像をいかに語るか」	九州大学国際ホール	主催：九州大学韓国研究センター 共催：九州大学P&P
2010	2	4	第47回定例研究会 アントニーナ・パーヴロヴナ・エム(サマルカンド国立外国語大学韓国語学科長)	九州大学韓国研究センター	